

あ と が き

三寒四温の春というが中々暖かくならないと感じているこの頃です。

3月13日よりマスクの規制が緩やかになり、日常の生活の光景を取り戻す一歩となっていくのかと思われましたが、人々はマスクを手離すのが怖いのか街中にはマスク姿が溢れていて春爛漫とはいかないもどかしい現実です。

さすがに子供たちは公園で元気いっぱいに歓声をあげ遊んでいてほっとしますが、見守る親たちは外でもマスク姿の人が多くみられます。

花粉症のころだからかなと思いますが、日本人の真面目さともいえます。

卒業シーズンでもあり式の様子が報道されますが、学生たちは自分たちの大切な季節が削られたとは思ってはず、コロナ禍にあっても大事な瞬間を共有しあい共に成長していっていると胸をはります。むしろ大変な状況を経験し、人としてのあり方、他人の大変さを想像する力を養ったと感じているのではと考えます。私たちも経験を糧により豊かな世の中になるようがんばらなければと、新たな出発を決意している学生たちを見て思わずにはられません。

娘のくりかえしの毎日の声掛けに、孫は家に帰るとすぐ上手に手洗い、うがいをします。公園で元気よく遊び駆け回って、いっぱい太陽を浴び育っていますが、去年は一家でコロナに感染し、つらい経験もしました。3日間くらいでしたが高熱が出て医療機関で車で点滴をしてもらいました。

私も食料を送ったりと気をもみました。

施設にいる母親にも会えていません。記憶があまり定かでないのが幸いですがおやつ
の差し入れの量を増やすように催促があったので元気です。

3月30日には97歳になります。寝ているときになんとなく思い浮かんだり気になって
いますが3年も経過すると、そのことに慣れてしまうのが怖いです。

家族に見守られながら旅立つという事ができず、孤独に亡くなっていく状況はまだまだ
続くのでしょうか。何とかこの災いを人類が克服していく事を祈ります。そのために
できる事を考え取り組んでいこうと改めて思っています。

(編集委員長 貞永 明美)

あ と が き

かりんとうの話

普通「かりんとう」といえば小麦粉などを練って細長くしたものを油で揚げ、黒砂糖を絡めて乾かしたものが一般的だ。長さが10センチほどの黒くてカリカリした菓子で、昔は量り売りをしていた。駄菓子屋ではおばちゃんが大きな瓶から2-3本を素手で取り出して渡してくれた。大体数本1-2円程度で買えたので、少年時代お小遣いが逼迫すると買う菓子の定番だった。こういう経験を繰り返したせいで、私は黒砂糖味の菓子はなんだか貧乏で惨めなイメージが染みついたひねくれた少年になってしまった。

実はこのかりんとうは黒砂糖味だけではなく、サツマイモを細長く刻んで油で揚げ砂糖を絡めた菓子をかりんとうと呼ぶこともある。鹿児島県などでは「芋けんぴ」というそうだがこちらは黒砂糖味ではない。黒砂糖かりんとうと同様に甘い菓子だが、やや硬く、噛むとサツマイモの風味がする。

そして玖珠には「海賊かりんとう」という菓子もある。製法の詳細は不明だが小麦粉と砂糖などを練った生地を細長くして油で揚げたもののようだ。黒砂糖かりんとうや芋けんぴのように砂糖で絡めておらず、やや硬く少し甘くて香ばしい素朴な菓子だ。高速道路のサービスエリアに売っているので休憩時につい買ってしまう。

こうしてみるとかりんとうは甘くてカリカリした揚げ菓子という括りになるようだ。つまりかりんとうは一つの菓子では無く製法も材料も異なる「似て非なる物」が複数存在する。どれも甲乙付けがたく美味しい菓子なので問題は無いが、世の中、似て非なる物で混乱を来すことも少なくない。

困ったことに、医療の世界にも似て非なるものが存在する。いわゆる「疑似医療」とか「えせ（似非）医療」と呼ばれるものだ。二重盲検比較試験や第三者による追試のように客観的かつ科学的な検証を経ていない治療方法をあたかもエビデンスがあるように宣伝して患者を集めている。えせ医療の指摘には、研究者から論文が出ており信頼性があるとの反論もあるが、サンプル数が少なく統計処理も不適格で論文の体をなしていない投稿を査読もなしに掲載する雑誌もあるので信頼性は低い。このような医療に、難治性あるいは病状の進行した悪性疾患の患者が取り込まれ不幸な結果になる例が後を絶たない。似て非なる甘いかりんとうとは異なり疑似医療は患者を不幸にするおそれがある。医療は経験や勘も必要で、それも尊重されるべきだが、基本的には科学でありevidence-based medicineの立ち位置にあることを忘れてはならない。

一時休刊していた大分県医学会雑誌は本年4月よりWEB版として復刊しました。本誌は大分大学医学部や大分県立病院の先生を編集委員に迎え査読を行って掲載しています。メジャーな学会誌と比べると歴史も浅く権威はまだ十分ではありませんが、今後会員各位の発表の場として積極的にご投稿をお願いいたします。

（副編集委員長 吉賀 攝）

あ
と
が
き

これからの医師会 ―“聞いて、見て、感じる”―

コロナ禍も現実問題として実体は存在しますが、言葉としては災禍の意味合いが薄くなってきました。医療界および一般社会も視点と立脚点が従来の位置へ戻りつつあります。コロナ禍での医療の問題点の洗い直し、医学的な検証は様々な形で関係者が取り組んでおり、その結論に期待することとして、本稿では割愛します。

さて、“コロナ禍”という事由で一時、議論や交渉が中断していました医師会の本質的な課題を私なりに考え、数年前の記憶を思い起こしてみました。順を追って記していきますが、各郡市等医師会の未解決のままの“地域医療”の諸問題、具体的には各医院の抱える患者の動態・病態の変化に伴う課題、つまり密接な生活指導や通院指示の履行状況の現状の把握、特に高齢者に焦点を当てますと、切り離すことのできない生活と医療の実態で解決策が施されないままに困窮しつつあることはどのようなことが挙げられるのか？ “聞いて、見て、感じる”医療体制が、メリットも無視はできませんが、本来の対面診療とは対極に出現したオンライン診療なるもので確実性を失っているものがあるのではないかと。など典型的な“地域医療”の形を体現する大分県での医療面、行政面、そして患者サイドの今後の在り方はどうあるべきかなど、コロナ禍により議論の最中で中断されたままになっていたことですが、未解決な課題が山積しています。これらの点は、地域医師会よりの入念な“聴き取り”の形に戻って再度、現実的な問題点を明らかにする必要を感じます。他方、内なる課題として悪化の一途をたどる医療人材の確保の問題、これは直近にスタートする医師の働き方改革とも関連を持ちます。コメディカルの看護師を中心として人材の育成と各地域での確保は地域医療の存続に直結した問題です。既に始まったオンライン資格認証制度を嚆矢とする未来的な医療DXの展開に各医療機関はどう対応していけばよいのか、対象は拡大しつつある産業医の確保などの、私自身も情報と具体的な対応策を十分に持ち得ていない状況です。

上記の如く種々の問題点を可能な限り掲げてみましたが、患者さんとの対面診療の基本、“聞いて、見て、感じる”をこれからは各地域医師会の先生方を相手に、同じ立場に立ちつつ、情報を共有し、お互いの頭で考えて、課題解決に一つ一つ取り組むことに立ち返ることが、県医師会と各郡市等医師会の本来の立ち位置と私見ながら考えております。今後のさらなる会員の先生方からの問題点の発信をお願い申し上げ、本稿の筆を置かせていただきます。

(副会長 植山 茂宏)

あ
と
が
き

鬱陶しい雨が続いております。熱中症の患者や新型コロナウイルス感染症の患者も増えてきました。皆様もお体に気を付けてください。

さて、大分県医師会は8年に1回巡ってくる九州医師会連合会の幹事県がやっと終了し、7月に長崎県にバトンタッチします。6月3日に行われた九州ブロック日医代議員協議会・連絡会議は河野会長の出身地である別府市で行われ、来賓に岩屋毅衆議院議員、長野恭弘別府市市長、横倉義武日本医師会名誉会長をお迎えし、盛会のうちに終わりました。また、6月11日には河野会長新体制になり、初めての定例代議員会が行なわれ無事終了し肩の荷を下ろしたところです。

日本医師会は松本吉郎会長になり、1年を迎え活発に活動しているように見えます。しかし問題山積の状態です。

- ・物価高騰、賃上げの中の来年の診療報酬改定の交渉
- ・少子化、子ども政策の財源不明、社会保障費がもし使われれば医療費は削減
- ・財務省からは「病院のコロナ太り」と言われる中、半分ほどの病院は赤字の状態
- ・かかりつけ医機能の義務化の動き

組織強化をはかり交渉力をつけるしかありません。

そして衆議院の解散が見え隠れします。意見を発信するには政治力も必要です。正しいだけでは意見は通りません。民意が重要です。民意とは票です。

さて、私はコロナ禍で中止だった大分大学の新入生の歓迎会が久々にあり出席しました。皆明るく爽やかで未来を感じます。その中でひときわ目を引いたのは私の高校の後輩で、なんと47歳の新生でした。大阪大学工学部を卒業し一流企業に就職していたN君で、礼儀正しく理知的でした。周りの反応を心配すると、とても慕われておりパソコンの統計処理や、試験前にも内容を教えてもらっているとのこと。同級生の中のメンターなのだと思います。新生がんばれ！N君がんばれ！

(編集委員 谷村 秀行)

あ
と
が
き

梅雨も明け、夏本番を迎えました。コロナウイルス感染症も2類相当から5類感染症に移行し、コロナ感染者が増加してきていますが、皆様はいかがお過ごしでしょうか？

私は大分県の急速な人口減少を非常に危惧しています。大分県から発表される、「大分県の人口推計結果の概要」を眺めていますが、令和5年6月1日現在で大分県の人口は1,098,421人であり、前年同月現在の人口と比較すると9,463人も減少しています。

このような少子高齢化に加えて、診療報酬は高齢者医療費分の増加の伸びに抑えられており、賃金の上昇や物価、電気・ガス・水道代、医療材料や食材、人件費等の増加が医療経営に影を落としています。

労働力不足に対しては、外国人の技能実習生の雇用を促進し、タスクシフト・タスクシェアを試みっていますが、限界があります。ICT・医療DXなどを活用し、人を介さず省人力化する取り組みが急務です。

全国には地域医療情報ネットワークが200以上あるといわれており、各医療機関がネットワークでつながりつつありますが、今後は政府が推進するオンライン資格確認システムのネットワークを拡充し、レセプト・特定健診情報に加え、予防接種、電子処方箋情報や電子カルテの医療情報や介護情報等について、クラウド間連携を実現し、自治体や介護事業者等を含め、必要なときに必要な情報を共有・交換できる全国医療情報プラットフォームの整備が進んでいくと思われます。

便利にはなるものの、マルウェアのサイバーリスクが高まっており、各医療機関が自己防衛しなければならない状況です。

ベンダー側の対応として、Firewall等のゲートウェイセキュリティの導入、クラウドバックアップやVPNの脆弱性の調査などマルウェア感染予防対策が必要です。また、平時より自院で行う対策としては、マルウェア感染時のマニュアル作成と紙カルテ運用訓練等があります。感染してしまった場合は、サイバー保険に加入していれば保険会社の緊急時サポートサービスを受け、デジタルフォレンジック（侵害調査を含む）、データリカバリー、恒久対策、記者会見支援、コールセンター立上げ等を行います。

今後、大分県医師会会員福祉部としては、大分県DX推進課との共催で、大分県警、ネットワーク専門メーカー、損害保険会社から講師を招き、サイバーセキュリティに関するセミナーを開催する予定です。ぜひ、ご参加頂けると幸いです。

（編集委員 帆秋 伸彦）

あ と が き

今年もお盆は岩手から娘一家が、福岡から息子一家が孫を連れて大分に帰ってきました。移動は猛暑と台風で大変だったようですが、久しぶりに一家9人が勢ぞろいして楽しい時を過ごしました。岩手から帰った男の子の孫は世界大会のせいかバスケットにハマっていて、用意したバスケットボールでドリブルのまねごとをして走り回ります。6歳になって自転車の初乗りにも後ろから支えて付き合わされました。運動量が半端ないので途中で息が切れて、「じいじは年だから少し休もう」と提案したら孫の一言、「じいじはまだ若いよ」。休みたくないから口にしたお世辞なのかもしれないけれど、この一言が胸に突き刺さりました。この子達とこれから一緒に過ごす時間が未だ私に残されているとしたら、今が最も若い時間なのだと!!言葉に乗せられて足はパンパンになりましたが、何だか嬉しい時間でした。

アルツハイマー症に対するアミロイドβにくっついて脳からの排泄を助ける「レカネマブ」が早期承認を果たし、大分県で問題となっている2型糖尿病合併慢性腎臓病患者にも非ステロイド選択的ミネラルコルチコイド受容体拮抗薬「フィネレノン錠」がエンドポイントを有意に下げるなど嬉しいニュースが飛び込んで来ています。投与条件や薬価など超えなければならない問題も多くありますが、少しずつ希望の光が見えてきています。癌の分子標的薬など我々も新しい勉強が必要な時代となっています。

地域包括ケアシステムの構築、多業種連携は遅々として進まないなか、2023年も半ばを過ぎました。その中核となるべき有床診療所の数は夜勤看護師の激減で減少の一途を辿っています。同級生が2度目の定年を迎えて優雅な生活をしている中、いったいいつ迄働き続けるのだろうと、地域の医師であることを自覚する中、課題は山積していますが皆で力を合わせて頑張っていきましょう。だって皆様にとってこれから生きゆく時間の中で今日が最も若い日なのですから。

(編集委員 後藤 正幸)

あ と が き

平成25年に私の主治医（乳癌手術）でもあった木本医院の故木本明博先生のあとを引き継ぐ形で、県医師会の役員（常任理事）となって10年近くも経過しました。

産婦人科医として、女性の社会的課題にとり組むのも自分の仕事と考えてきました。元々産婦人科医は保険点数などに疎^{うと}いと言われていますが、やはり医業をしっかり成立させ、国民の健康に寄与する事を両立させなければならないと思います。

何から始めたらいいのか詳しくわからないまま、まずは与えられた仕事を自分なりに取り組んできましたが、九州全体の会議に参加しても中々発言できず、もっと積極性を持たなければと反省ばかりの活動状況です。

「女性一人を会議のメンバーに」という事で、県の会議にお声がかかる事も多いのですが、自分の得意分野（あるかな？）とは関係のない事も多く、何でも吸収する意欲はありますので、これまで以上にしっかりと結果に反映させていきたいと考えています。

これまでは「女性医師」という事を意識した事はあまりなかったのですが、せっかくの機会を大切に、貴重な発言の機会を頂いたと考え、皆さんの声を伝えていけたらとも思っています。

若い先生方の声をもっと聞けるようチャンスを作っていかなければと考えています。

大分大学医学部医師会も設立され、勤務医の先生方にも働きかけていきたいと思えます。

風通しの良い状況を作れるようにこれからも活動していきます。よろしく御指導下さい。

（編集委員長 貞永 明美）

あ
と
が
き

ニースの空

9月18日のニースは紺碧の空だった。早朝のテレビジョンで見せてくれた、これから始まる世紀の死闘、ラグビーワールドカップ日本代表対イングランド戦の凄愴な戦いざまを瞬時忘れさせてくれる、気持ちが吸い込まれていくような今まで見たことがない鮮やかな南仏のシャインブルーの、まるで高いところに、しみ、ひずみのないカーテンがかかったような空。日常に忙殺され、空の色に感動したことは、ほとんど記憶のかなたに押しやられている。

改めて、大分県医師会館の7階のロビーから晴れ渡った別府湾の空を凝視した。油布連山のきつぱりとした山の端を抱く山容、その望下に海岸線を形どっていく別府市街、遠くは杵築、国東の山々、それぞれが晩夏の山霞とともに目に入って来た。身近にこんなすべてを忘れさせてくれる世界に2つとない景観があったことを見逃してきた、著者の貧相な日常・人生を自省した。

遠くはウクライナ、イスラエル・パレスチナ、国内では東京で、それぞれ、多数の犠牲者を出している戦争や、日本国内の今後の医療・介護の在り方に直結する保険・医療制度の改変の行方等、地上では気持ちが穏やかではない情勢が否が応でも耳に入ってくる。振り返ると考えつくせない身の回りの、重責に押しつぶされそうになった医療・労働問題、これらに追われ続けてきたこの4半世紀だった。

これからも、ラグビーの試合の如く、ボールを追いかけて走り続ける任務と仕事に追われる日々が連綿としていくであろう。

いまだにピッチでスクラムを組むラグーマンの一人として、“勝敗は兵家の常”であり、むしろ負け戦の方が過半である。著者自身として、結果のみを予言・期待する医療・医政に携わる者にはありたくない。必ず、結果を出すために、足の遅速は別として楕円のボールを追いかけて続けるように、医療・医政の目標に向かって一瞬の隙も見せず、準備を積み重ねていくことに専念する一選手としてあり続けたいと、図らずもニースの紺碧の空が諭してくれた自分を見つめなおす一つの機会となった。

(副会長 植山 茂宏)

あ と が き

炭酸饅頭の話

炭酸饅頭とは小麦粉などの生地には炭酸（重曹：炭酸水素ナトリウム）を練り込み、加熱することで発生する炭酸ガスによって膨らませている饅頭だ。生地を膨らませるには酵母（イースト）の発酵を利用するもの、重曹に他の添加物などを配合し風味と効果を改善したベーキングパウダーなどがあるが、重曹が最も安価なので昔は家庭で作る素朴な田舎饅頭は炭酸饅頭が主流だった。

手軽な炭酸饅頭だが、独特な匂いと、苦味が欠点だ。特に重曹を多く入れるとよく膨らむが、今時のパンに練り込む油脂（ショートニング）が入っていないので、時間がたつとパサついてしまうので見かけほど美味くなかった。甘い物には目のない私は少年時代、饅頭は好物だったが炭酸饅頭は積極的に食べたいとは思わなかった。そんなナイーブな少年の心は親戚のおばちゃんには通用せず、容赦なく私に勧めるのだ。あの独特の苦味とパサつきが苦手だった。だからお土産にたくさん貰っても正直ありがた迷惑でさえあったのだ。

かといって捨てる事も出来ず、時間が経てば風味はどんどん劣化する一方だ。電子レンジもない時代なのでコンロに金網を乗せあぶって食べようとするが表面ばかり熱くなるだけで美味くならない。結局私が考えついたのが饅頭にたっぷりバターを塗っていただくことだった。生地なんてどうでも良い、餡の甘みとバターの塩味が相まってそりゃ美味いに決まっています。素朴な炭酸饅頭を懐かしく思う方も多いだろうが、実際ふっくらとした見かけほど美味くないというのが私の「個人の感想」だ。

さて、令和6年度の診療報酬改定の時期になった、今回も明るい材料が無く、財務省を中心に支払い側が強行に報酬を引き下げようとする動きがある。特に内科系クリニックを狙った引き下げを画策しており、日医は病院と診療所を分断する目論見だと強く反発している。

今回は本当にまずい炭酸饅頭を強引に食わされる結果になりそうだ。我々にはそれを美味しくするバターはなく、冷めてパサついて苦い炭酸饅頭を食わされてしまう気がするのだ。

（副編集委員長 吉賀 攝）

あ と が き

24年度診療報酬 0.88%引き上げに決定

明けましておめでとうございます。本年も宜しくお願い致します。

さて寒い日が続きますが皆さまいかがお過ごしでしょうか。インフルエンザや新型コロナの感染流行が続き忙しい日々が続きます。ご自愛のほどお祈り申し上げます。

今回日本医師会の松本会長の新体制となり初めての診療報酬改定でした。私の経験上では最も激しいバトルだったと思います。個人的にはやっと勝ち取った感がありお疲れさまでしたと言いたいです。ただ現場からはこれではやっていけないとの意見はあると思います。今回の経緯を自分なりにここで簡単に解説したいと思います。

まず年度末に発表された予算編成は、それを基に個々の割り振りを決める大本になります。中医協等で今後の詳細な点数、割り振りが決められます。大本で決まるのです。医療側は職員の賃上げ上昇への対応と、光熱費、材料費の高騰また病院の経営が悪化しているため増額を求めました。財務省側は本体マイナス改定を強く主張しました。

まず財務省は経営が悪化している病院の診療報酬を引き上げてその分診療所の単価を下げるため、診療所の初・再診料の引き下げを主張しました。

11月1日 診療所の3年間の収益は12%上昇し経常利益率は3.3%から8.8%上昇しており利益剰余金もあると、財務省がマスコミを通じて発表。

11月2日 3年前はコロナの影響で大幅な収入減になりそれをベースに上昇しているとはおかしい。コロナ前後では経常利益率は4.6%から5.0%でほぼ変わらない。ワクチン接種と発熱外来対応を除くと3.3%であると、日本医師会が発表。国会議員にも説明に回りました。財務省が恣意的にデータを使ったのは私にも納得できません。

他にも紙面上字数の制限で書けませんが、財務省は診療所の院長の給与の過大の金額、診療所が減れば病院の医師が増えるや、診療所の開業規制、地域別の報酬体系の検討、外来医療計画の県知事の権限強化、かかりつけ医の制度整備など診療所をターゲットにしています。病院と診療所を分断し医療費を削減する作戦なのでしょう。

最後に厳しいようですが医療費は高齢化・高度化で毎年約2.5%ずつ上昇しています。保険料増収、薬価改定での削減やコロナ特例終了の財源を使っても、本来ならば2%以上の上昇が妥当だとも思います。また診療所の報酬は0.25%引き下げるとしています。厚労省が求める4%の賃上げは難しいと思います。現場はとにかく与えられた環境でベストを尽くすしかありませんが。

(編集委員 谷村 秀行)

あ と が き

能登半島地震を受けて

令和6年1月1日に発生した能登半島地震の震災で被害に遭われた方々に心よりお見舞い申し上げます。改めて地震の恐ろしさをテレビ・インターネットなどの報道から見聞きし、地震について知識をつけ、平時から備える必要があると強く感じました。そこで、改めて地震について調べました。

内閣府の防災情報のページ (<https://www.bousai.go.jp>) によると、地震のタイプは大きく2つに分けられ、プレートとプレートの境界で起こる「海溝型地震」と、断層がずれることによって引き起こされる「活断層による地震」があります。海溝型地震は、規模が大きくて、揺れる時間が長い地震になりやすく、東日本大震災（東北地方太平洋沖地震）や近年心配されている南海トラフ地震は海溝型地震と考えられています。

活断層による地震は、地下の比較的浅い部分で発生する為、局地的に大きな被害をもたらす危険性があり、熊本地震や今回の能登半島地震は活断層による地震と考えられています。

大分県に目を向けると、大分県内の主要な活断層には、日出生断層帯、万年山一崩平山断層帯、中央構造線断層帯（豊予海峡一由布院区間）があり（政府地震調査研究推進本部HPより）、昭和50年4月21日には由布市湯布院町の九重レークサイドホテルの一部が押しつぶされた地震（大分県中部地震）も起こっています。

また、南海トラフ地震が危惧されていますが、今後30年以内に発生する確率が70から80%であり、昭和東南海地震・昭和南海地震の発生から約80年が経過していることから切迫性の高い状態となっています。また過去の地震記録をみると、永長地震（1096年）から2年2か月後に康和地震（1099年）が発生、正平東海地震（1361年）から2日後に正平南海地震（1361年）が発生、安政東海地震（1854年）から32時間後に安政南海地震（1854年）が発生しており、つまり東海・東南海・南海地震が時間差で連動して起こる特徴があります。

今回、日本医師会の要請で大分県医師会よりJMAT隊員が小松総合体育館における1.5次避難所（2次避難所に行く前の健康チェックを行い、感染症のある人を留めおく場所）に派遣されています。このような災害時の対応経験を蓄積しつつ、南海トラフ地震が発生した際、大分県でどのように避難・復旧・医療支援をしていくか模索する必要があります。また、避難者が高齢化しているため、避難所で動けない方や寝たきりの方が多くおり、介護職や理学療法士・作業療法士などのリハビリ職の支援が重要な役割となってきていると感じています。

（編集委員 帆秋 伸彦）

あ
と
が
き

今年の春はいつもの春と何か違う。

菜の花は、久大線向之原駅周辺の線路の両側に鮮やかな黄色い色をつけている。小鳥のさえずりも聞こえている。馴染みの天ぷら屋でこごみやふきのとう、タラの芽も食べた。美味しかった。苦味もあった。しかしやっぱりいつもの春と少し違う。正月から能登の震災があったからか、ロシアの進行が3年目を迎え不条理の優勢が伝えられているからか、イスラエルのガザ侵攻が続いているからか。政局も揺れている。世の中に不条理と無理が横行し、それを子供達はじっと見ている。この子らが作る次の時代がとても心配になる。

さて私事になるが、今年44歳になる甥が8月中旬から腹部膨満感を主訴に愛知県の医療機関を受診し、9月中旬に小腸癌、腹膜播種、腹水貯留、胸水貯留、の診断を受けたことを聞かされた。彼は十分に帰って療養したいと伝えてきた。妻と娘（9歳）、息子（6歳）を名古屋に置いて十分に帰りたいと。大分大学医学部附属病院腫瘍内科での通院抗癌剤治療が始まった。その後入院して計3回の抗癌剤治療を行ったが思ったように効果は出ず、緩和治療の方向となり本年1月26日に自院に転院となった。ベットに横たわる甥に、何故大分での療養を希望したのかその理由を聞いた。2週間をかけて聞き出した彼の本音は、

1つ、我がまを言える環境で、できれば苦痛を最小限にしてほしいと思った。

2つ、母と妹の事実を受け入れない状況、特に母の精神状態が心配だった。

3つ、子供に苦しがっている自分を見せたくなかったし、これからも続く日常を変えることなく過ごさせたいから、しっかり者の妻に子供達を託した。だった。

1つ目については、彼にできる限りを約束した。

2つ目については、姉や姪に時に厳しく、時には論理的に感情的に理解できる様に時間をかけて説明した。

3つ目について、私自身も10歳のときに母（彼にとっては祖母）を直腸癌で亡くしたが、最期の2ヶ月身近で母の苦しむ姿、やせ衰えた姿（その頃はIVHなども無いものだから）私への言葉などが60年経った今でも心の中に浮かび、それが自分の人生を励まし続けている事を伝えた。子供は充分理解できるので、伝えたい事、苦しむ姿を焼き付けて彼らの人生の支えとすることは必要なことではないかと話した。

昼間は母、夜は妹と交代で彼との二人だけの時間を作った。妻と子供は忙しい中、5回も飛行機、フェリーを利用して名古屋から週末通った。こうして35日間に彼にとっての課題は少しずつ成果をあげた。2月25日、連休を利用して訪れた最終日の朝、彼は子供達を呼び少し話をしたようだ。病室からは大きな泣き声が聞こえてきた。自分の病気を含め死んでゆくことを、自分の口から子供達に伝えた模様だ。4日後、母と妹からそれまでの「頑張れ」ではなく、「よく頑張ったね」の言葉を聞いて、彼は1分も経たないうちに2月29日午前3時8分、静かに息を引き取った。

これで良かったのかなと自問自答していたとき、私の女房が日曜日に奥さんと子供がフェリーで帰った後の病室で、「あとやりたいことは？」との間に「やり残したことは何もない。」とすっきりしたと笑顔だったことを聞いて少し安心した。

尊敬した西行法師の辞世の句

「願わくは花の下にて春死なむ その如月の望月のころ」

ちなみに仏陀の命日は旧暦2月15日、西行法師は2月16日だったと聞いている。

3月1日、自院の職員からの庭の桜が花をつけた、との報告に私と女房で庭に出てみた。昨年まで花をつけたことのなかった一本の河津桜が満開の花を咲かせていた。肖ったな。歓談の好きな彼らしいなとしてやられた感を覚えた。仕返しに2月29日が命日だからお前の命日は4年に1回だとやり返した。今年の春に違和感があったのは受け取る側の心情と状況がいつもと異なっていたからなのか。医師の仕事って辛いですね、皆さん。

（編集委員 後藤 正幸）